

「第14回 市民読書感想文」入賞者決まる

最優秀作には伊藤久美子さん(一般)と奈良美樹さん(学生)

市立図書館主催の「第14回市民読書感想文」には今年も多くの応募がありましたが、厳重な審査の結果、次の方々が入賞されました。入賞された皆さんには今月7日、賞状並びに副賞がそれぞれ授与されました。入賞作品の中から、一般の部最優秀作「水なき雲」を読んで(伊藤久美子さん)を掲載します。

〈一般の部〉

- 最優秀作・「水なき雲」を読んで
伊藤久美子(出川)
- 優秀作・「遺された妻」BC級戦犯横浜裁判
工藤恵子(釈迦内)
- 〃・母として妻としての旅路
高松イク(十二所)
- 佳作・杏沢圭子、佐藤正、近藤敦子
伊藤ユリ子、畠山節子(敬称略)



伊藤さん

〈学生の部〉

- 最優秀作・「こころ」を読んで
奈良美樹(鳳鳴高2年)
- 優秀作・「ひめゆりの塔」を読んで
成田康子(鳳鳴高1年)
- 〃・十五歳の絶唱
桧山みゆき(鳳鳴高1年)
- 佳作・佐藤里香、太田見昭子、山田順子
稲葉順一、富樫奈津子(敬称略)



奈良さん

「水なき雲」を読んで

伊藤 久美子(主婦・27歳)

なぜ、なぜ俊鷹は死を選んだのか。なぜ母親は業のような愛を押しつけようとするのか。なぜ男達は家庭の外にやすらぎを求めようとするのか。何が一番人間にとって大切であるのか。さまざま疑問があとからあとから湧き出てくる。

「水なき雲」、最初これを手にした時は、青空に浮かぶ雲のような軽やかさだけしか連想しなかったのに、今は言い知れぬ重苦しさにとっかつか押しつぶされてしまっている。

わたしは今、この胸の重苦しさがいっただい何であるのか自問せずにはいられない。怒り? 悲しみ? いやそう言うてしまっただけはあまりにあっけない気がする。ただそこには、子供達の男達のそして女達の悲痛な叫びと問いかけがあった事だけは断言できる。

わたしが一番衝撃を受けたのは俊鷹と母佐貴子の生き方である。息子を東大に入れる事だけをひたすら望み、より一層勉強に身を入れるようにと家を軒買い与え、そこで息子と息まわしい関係まで結んでしまった佐貴子。すべては愛する我が子の為と言ってしまう。聞かぬはいいが、どうしてもそうは思えない。自分のエゴの為に俊鷹の心身を縛りつけ、さらにその命まで取りあげてしまう結果を招いたのであるから。もし二人の関係が夫が知ったらどうであろう。地獄そのものではないだろうか。

やさしさというオブラートに包まれた狂気じみた母性、それを飲まれた者は全く悲惨である。やさしい母の期待に応えたい一念で勉強し、いつしかその事だけの為に生きるようになった俊鷹。「約束どおり合格は果たした。これで気がすんだろ」と書き残して壮烈に死んでいった俊鷹の憤りが悔恨が痛いほど伝わってくる。人はそんな彼をバカな奴だと言うかも知れない。しかし彼も必死に悩みあぐねていたのではないだろうか。いつか、こんな事を言ったのである。「人間にとってやさしさが大事だと本気で思っているのか。それならどうして親も教師もそのやさしさとやらを第一に教えないんですか。みんなすぐ成績のことを言っただけで、やさしさというのには真ちゃんのような敵意のない人間だと思っただけで、その類稀な人格に誰が一体頭を下げる?」、また「やさしさが本当に大切ならなぜ本気で人間はどう生きるべきかを考えないんだ。大人が大きな口を叩くならまず、殺す事のない世界を築くことだよ」と。あの時、俊鷹はまさに素朴で最も困難な問題に突き当たっていたのだろうか。そして否定しながらも真のやさしさを切に求めていたに違いない。でもその痛烈なまでの彼の心の叫びを誰一人として聞いてはくれなかったのである。彼のその無念さと短い一生を思うとたまらない気がする。何と人間とは人の心の奥底を知り得ないものだろうか。最も身近な

家族でさえ傷ついた彼の心を救うことができなかったのだから。

では、人間とは所詮孤独で、人と人とのつながり、触れ合いなどなんの意味もないのだろうか。否、そんな筈はない。俊鷹の死によって何が一番大切なかを教えられた純一が、壊れかけた家庭の幸せを取り戻そうと憤然と勇気をもって立ち向って行く姿に、またその純一に傷つく事を恐れては尊い物を無くしてしまうだけだと悟った決然たる父親の姿に涙が出るほどに喝采していたのだから。

人間とは傷つき易く、その割に人を傷つける事には無頓着で、欲望にもろく、それでいて人の目を気にする。またさびしがりのやのくせに誰も知らない隠れ家を欲したり、ほんにととらえようのないものである。しかし、わたしが思うに、一人一人ではとかく正道からはずれがちな人間であるからこそ真のやさしさをもって理解し合い、向上するよう努めるべきではないか。そしてそれを施行すべき最小限のつながりが家庭なのでは。わたしは今、俊鷹が大人達に突きつけた疑問を心の中で幾度も繰り返しながら、初めとは違う、さわやかな、それでいて厳肅な感動をおぼえずにはいられない。そしておぼろげではあるが、作者が言わんとしているものの確かな手ごたえを感じている。

「水なき雲」。それは世間の風におおられ、欲望の嵐に吹き流されてしまおう弱い人の心、もろい家族なのでは。とすれば時代が変わり、住む人が変わろうとも、そこに人々の卑しい欲望がある限り「水なき雲」は絶えることがないであろう。

家族でさえ傷ついた彼の心を救うことができなかったのだから。